

平成28年度 全国ルール統一研修会 日程

(平成29年度に向けてのルール研修会)

1. 日時 平成29年2月11日(土)13:00～12日(日)11:45
2. 場所 パナソニックリゾート大阪
3. 講師 千野 雅人 (技術委員会委員長)
平尾 豊 (技術委員会副委員長・競技部長)
藤村 利道 (技術委員会副委員長・審判部長)
馬場 治男 (競技部副部長・管理課長)
安枝 和子 (審判部副部長)
清水 恭子 (競技部・アンチ・ドーピング課長)
森 義彦 (競技部・施設用具課長)
近藤 聡史 (総務部・企画課長)
真 喜代司 (技術委員会アドバイザー・国際委員会委員)
中村 康夫 (技術委員会アドバイザー・事務局長)

4. 日程

時 間		内 容		講師 及び 担当者
2月 11日(土)				
(時刻)		(所要時間)		
13:00	13:10	0時間10分	開会行事 (公社)日本ホッケー協会 あいさつ 技術委員長あいさつ	専務理事:寺本 祐治 技術委員長:千野 雅人
13:10	13:30	0時間20分	・施設用具関係について 公認人工芝ピッチについて	施設用具課長:森 義彦
13:30	13:50	0時間20分	・アンチ・ドーピングに関する問題について [平成29年度のアンチ・ドーピング規定変更点を中心に]	アンチ・ドーピング課長:清水 恭子
	休憩	10分		
14:00	14:20	0時間20分	選手・役員の登録(カード発行を含む)について 役員登録とグッズ送付、過去の登録処理について	競技部管理課長:馬場 治男 技術委員長:千野 雅人
14:20	14:40	0時間20分	国際ホッケー界での外交の必要性和アンパイアリング	技術委員会アドバイザー 国際委員会委員:真 喜代司
14:40	15:00	0時間20分	東京オリンピックに関する国内状況整備について	技術委員会アドバイザー 事務局長:中村 康夫
	休憩	10分		
15:10	16:00	0時間50分	・ルール研修 1 [競技役員と大会派遣] [平成28年度大会の反省] [平成29・30年度規則書の説明]	審判部長:藤村 利道 審判部長:藤村 利道 競技規則担当:平尾 豊
	休憩	10分		
16:10	16:50	0時間40分	・ルール研修 2 [規則書説明2]	競技規則担当:平尾 豊
16:50	17:30	0時間40分	・ルール研修 3 [29年度大会レギュレーションについて] [競技運営・ジャッジテーブル業務について] [競技運営規程について]	技術委員長:千野 雅人 競技部長:平尾 豊 審判部規程担当:近藤 聡史
19:00	(予定)		懇親会 <進行…馬場 治男>	
2月 14日(日)				
<司会進行…馬場 治男>				
9:00	10:00	1時間00分	・質問要望事項に関する回答及び質疑応答	技術委員長:千野 雅人 競技部長:平尾 豊 審判部長:藤村 利道
	休憩	10分		
10:10	11:00	0時間50分	・ルール研修 4 [平成29年度の競技会に向けて]	技術委員長:千野 雅人 競技部長:平尾 豊
11:00	11:30	0時間30分	・質疑応答 [講習会全般について]	審判部長:藤村 利道
11:30			閉会行事 (公社)日本ホッケー協会あいさつ 技術委員長あいさつ	専務理事:寺本 祐治 技術委員長:千野 雅人

1.10 ゴールは、各バックラインの中央に、そのラインの外側に接して、競技フィールドの外側に置かれる。ヘルメット、フェイスマスク、ハンドプロテクター、タオル、ウォーターボトル等の道具類はどのようなものであっても、ゴールの内側に置くことはできない。

2.1 試合中はどのような状況であっても、プレイに加わることができるプレイヤーの人数は各チームとも最大11名である。

もしも、許された人数より多く(最大12人以上)のプレイヤーがフィールド上にいた場合は、その状況を修正するために時間を停止しなければならない。そのことが、不注意によって起こったことで、試合に大した影響もなくほんのわずかな時間であったならば、必ずしも警告を与える必要はないが、人数が増えていたことで試合に大きく影響を及ぼしていたならば、その行為があったチームのキャプテンに対しては、個人的な罰則(カード)が与えられなければならない。しかし、もしも時間が再開されたりプレイがリスタートされていたりした場合には、時間停止前に下されていた判定を変えることはできない。

2.2 各チームは、フィールド上に1名のゴールキーパーを置くか、ゴールキーパーの特権をもつプレイヤーを置くか、又はフィールドプレイヤーとしてのみプレイするプレイヤーを置く。

上記のようなチーム構成を変更する場合、あるいは、ゴールキーパーの特権をもったプレイヤー(ピッチの中にいるか外にいるかは問わない)を変更する場合は、チームは必ずプレイヤーの交代をしなければならない。

4.2 プレイヤーは、他のプレイヤーに対して危険と思われるものは、いかなるものも身につけてはならない。

フィールドプレイヤーは、

－ 手の通常の大きさを著しく大きくしないようなハンドプロテクターの着用が許される。その条件を満たすものであれば、どのようなハンドプロテクターでも、通常プレイやペナルティコーナーの守備の時の両方の場合に着用してもよい。それらのハンドプロテクターは、内側のサイズが長さ290mm、幅180mm、高さ110mmの箱状の検査器具にすっぽり入りきる大きさでなければならない。(圧縮させて詰め込むようなものであってはならない。)

－ すねあて、足首を保護するもの、およびマウスピースの着用を推奨する。

－ あらゆる形状のボディ防具の着用が許される。(ペナルティコーナーの時に使用する、脚プロテクター、ニーパッド=ひざプロテクターなどが含まれる)それらの防具は、通常身につけているユニフォームの内側に着用しておかなければならない。ただし、ニーパッドは、その使用上の目的に照らして、ソックスの外側に着用することが許されるが、そのニーパッドの色は、ソックスの色と完全に一致した色でなければならない。ねあて、足首を保護するもの、およびマウスピースの着用を推奨する。

4.3 ゴールキーパーもしくはゴールキーパーの特権を持つプレイヤーは、両チームのユニフォームの色とは違う色のシャツ又は上着を身につけなければならない。(単色が削除)

9.8 プレイヤーは、ボールを危険なやり方でプレイしたり、危険を誘発したりするようなプレイ(危険にむすびつくと思われるような方法でプレイ)をしてはならない。

避けるのが妥当と思われる避け方を相手プレイヤーにさせた場合などは、そのボールは危険と見なされる。

9.16 フィールドやボール、他のプレイヤーやアンパイア、あるいは他の人に向かって、装具を含めてどんなものであっても投げつけてはならない。

ペナルティコーナーの後で、不要になったハンドプロテクター、ニーパッド、フェイスマスク等の守備側選手の防具にボールが当たった場合には、それがサークルの外であったならばフリーヒット、サークルの中であったならばペナルティコーナーが攻撃側に与えられる。

13.2c. 攻撃側23mエリア内で攻撃側がフリーヒットを行う場合は、フリーヒットを行うプレイヤー以外のプレイヤーは、すべてボールから少なくとも5m以上離れていなければならない。しかし、後で示すサークルから5m以内での攻撃側のフリーヒットの場合は除く。

f. 攻撃側23m以内のエリアで攻撃側に与えられたフリーヒットでは、ボールが5m以上動かされるか、守備側プレイヤーによって触れられるまでは、サークル内にボールが入るようにプレイしてはならない。ただし、「ボールが5m動く」というのは、**単一方向である必要はない。**

13.8e. 守備側プレイヤーは、両足をゴールライン上に乗せて立たねばならない。**ペナルティストロークを開始するための笛が吹かれたとしても、ボールがプレイされるまでは、ゴールラインを離れたり、どちらの足も動かしたりしてはならない。**

13.10d. 守備側プレイヤーが、ボールがプレイされる前にどちらかの足を動かすことを含めて、あらゆる反則をした場合:再びペナルティストロークが行われる。

守備側プレイヤーが、ボールがプレイされる前にどちらかの足を動かして得点を防いだ場合は、そのプレイヤーに注意を与えてもよい。また、その後のあらゆる反則に対しては、退場処分を科さなければならない。(グリーンカード、さらに続けて違反を犯した場合はイエローカード)

故意でなく守備側によってバックラインから出されたアウトオブプレイのボール:右か左かのふさわしい方の腕を肩の高さより下方に上げて、バックラインのボールが出たポイントを示し、続いて23mラインのリスタートするポイントを示す。 アンパイアシグナル

1.2 このライン(マーク)については、**シニアの国際大会においてのみ適用するものであって、大陸の大会や国内の大会については、別途発行する手引きを参照するよう**にしていきたい。

1.2 d すべてのラインの色は、白で描かなければならない。

白色のラインならびにマークは、シニアの国際大会の場合は強制とし、そのほかの大会でも推奨する。しかし、多目的使用のピッチで、他のスポーツのラインと共用的に描かれてある場合には、他の色でもかまわない。ホッケーが優先的に使用できないピッチでは、よく黄色のラインが使用されている場合が見られる。また、サンドベースのグラウンドで砂が表面まで見えているようなところでは、砂が白いためにラインを黄色にしたほうが格段に見えやすくなることもある。

1.4 サークル d 破線

これらの破線を引くのは、シニアの国際大会では強制とする。その他の試合で採用するかどうかは各国協会の裁量に任せる。 以前のコーナーのポイント削除